

1. 本研修に期待したこととその成果

私がこの研修に参加した理由は、スタンフォード大学で行われている最先端の研究に触れ、医用画像の将来像について学びたいと考えたからである。また、私はCTを専門としており、今回の研修ではCTに関する最新情報を得ることも目的の一つであった。CTについては、主に経カテーテル大動脈弁置換術(transcatheter aortic valve replacement: TAVR)の術前 CT についての講義や、病院施設および 3D Laboratory の見学が行われた。CT に関しては、最新の情報を得ることができたとは言えないが、3D ラボにおいて、目的部位別に画像処理手順がマニュアル化されている点、下肢動脈 CT の画像処理などに、独自の画像処理ソフトを用いている点が興味深かった。その他にも、Moseley 先生のユーモアたっぷりの講義や、各分野のスペシャリストによる講義はどれも刺激的で、有意義な時間を過ごす事ができた。特に、7T MRI による脳内イメージの画像化の可能性、分子イメージングによる”痛み”の画像化など、今後の進歩を非常に期待できる分野であると感じた。

2. 日米の放射線技師の違い、および診療放射線技師の国際的視野について

米国の放射線技師の特徴は、その業務が細分化されているところにある。米国では、放射線技師の免許の他に、モダリティごとの免許を取得する必要がある。また、MRI や CT 担当技師が、造影のための静脈ルート確保を法的に認められている点も大きな違いであった。米国におけるこのシステムは、一定水準の医療サービスを提供していく上で非常に効率の良いものであると考える。しかし、その一方で、免許による扱うモダリティの限定化や、3D ラボでのマニュアルに基づいた画像処理などは、効率的である反面、放射線技師個々の知識の幅を広げる上で障害になっているようにも感じた。

これに対して、日本の診療放射線技師は、さまざまなモダリティを扱うことが可能であり、知識の幅を広げ、広い視野で研究を行うことができる。また、JSRT による海外派遣事業などのバックアップも充実しており、研究を世界に発信していく上で恵まれた環境にあると思われる。

3. 本研修での経験を今後の活動にどのように活かすか

あっという間の 1 週間であったが、本当に貴重な体験をさせていただいた。本研修を終え、日本の診療放射線技師は世界に通用する！と感じることができた。この経験を多くの人に伝えることも我々の仕事の一つであると考えている。また、今回の研修で出会えた、スタンフォード大学の先生方や、高い向上心と熱意を持った第 8 期生の仲間達にもらった”Power！”を糧に、私も日々邁進していこうと思う。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださいました JSRT、スタンフォード大学の皆様、多大なサポートをしていただきました北里大学 佐藤団長、第 2 期生 松浦様、ならびに GEHC-J の皆様、本研修に快く送り出していただきました当院スタッフの皆様に感謝申し上げます。



最終日、終了証を持って Moseley 先生と。